



4 区 | 関 沢 行政区

地理



村役場が所在する伊丹沢行政区の東に隣接する行政区。かつて相馬から中通りへ塩の運搬に使われた街道である「塩の道」が通る。標高は400m程度で、飯舘村の中では平均的である。農業は稲作が中心で、水田に引く水を温めるためのため池が多く存在する。

地形的に、旧大舘村を構成していた地域とは特に結びつきが強かった。

文化・生活

兼業農家がほとんどで、平日は川俣町や南相馬市原町、福島市内に通勤し、土日に農作業を行う家庭が多かった。

行政区の活動として、ため池整備や草刈りを共同で行っていた。震災前は年に一度、田植えが落ち着いた6月頃に懇親会が行われ、ため池に整備した公園で魚すくいや輪投げといった催し物を行い、夜には皆で星を見た。他にも村の運動会に向けた予選会を地区で行ったり、遠方まで旅行をしたりしており、地域の結びつきは強かった。

関沢行政区には青年会の代わりに「生喜生起（いきいき）クラブ」が存在する。かつて祭事の際の盆踊りの主催、神社の旗立てなど地区の力仕事は20～30代の有志からなる青年会が担っていたが、若者の減少により1980年～90年頃には数名程度まで規模が



長井実 前行政区長

飯舘村出身。川俣高校を卒業後、川俣町役場で働く。震災時には住民の避難誘導にもあたった。高校時代は野球部での練習に加えて自転車で飯舘―川俣間の山道を通学していた健脚の持ち主。青年会の後身である生喜生起クラブ結成にも関わり、行政区の活性化には今も昔も大変熱心である。

行政区長の思い：

今の子供たちが将来帰ってきてくれる場所にしたい。学園に通う子供たちは村外から通っている子が多い。村外で暮らす孫やひ孫が「おじいちゃんおばあちゃんが住んでいたんだな」と飯舘村に思いを馳せ、いつか暮らしたいと思ったときに戻ってこれる場所でありたい。それをモチベーションとして、日々行政区の維持に励んでいる。

縮小してしまった。青年会が解散した後、代わりに青年会の会員とOBの有志によって結成された生喜生起クラブは、青年会に代わってこれらの仕事を果たし、コミュニティの維持に貢献した。

他地区と同様に結（ゆい）の文化があり、昭和50年代にトラクターが普及するまでは田植えを行う家で朝ごはんからごちそうになり総出で手伝った。凶作への警戒心は高く、各戸で1人あたり、1年分にあたる一俵半（90kg）の米を保管していた。なかには2年分蓄える家もあるほどであった。

森林の管理も丁寧に行われており、昭和40年頃までは炭焼き、2000年頃まではキノコの原木として販売された。

宮内行政区の綿津見神社の支社があり、毎年4月8日に祭礼があった。毎年4月末から5月はじめには、先述した周辺の行政区が綿津見神社の本社に集まり、例大祭が行われた。翌日には各行政区の神社で奉納をしてい

たが、現在は人口減少により例大祭のみが行われる。

踊りについて、他の行政区によくみられる「田植え踊り」はなく、民謡に合わせて踊る「手踊り」「宝祭（ほうさい）踊り」があった。同じ先生から習うため行政区の間で振りに違いはない。行政区によって衣装が多少異なる。

事故後は、71戸中13戸が帰村している（2024年4月現在）が、これ以上の帰村の見込みはあまりない。帰村せず、通いで耕作をしている人もいる。

店 事業所

店は雑貨屋が1軒のみあったが、震災前に閉業した。事業所にはかつて製作所が3軒あり、うち2軒は村外に移転し、今も稼働している。地区の兼業農家の多くは行政区内や草野行政区の製作所に勤めていた。

▼ 塩の道を今に伝える看板や石碑



コラム

【塩の道】

かつて相馬と内陸部を繋ぐ交通路である「塩の道」が飯舘村内を通っていた。原町から飯舘村に入り、八木沢、関沢、飯樋、久保曽、比曽を通して二本松に抜ける道である。八木沢や関沢に塩倉があり、八木沢には宿も存在した。

現在の交通のメインルートは県道12号線であり、かつての塩の道は一部で線形を変え、生活道路として残っている。今ではかつての塩倉の位置を伝える石碑が少数みられるのみである。

▼ 塩の道の地図（飯舘村史より）



人口

52人

最新(2020年)

1983年 429人

1998年 385人

2011年 313人



▲ 県道 31 号線より南方を望む



▲ 関沢の山津見神社